

渡島【木古内町】

つやま むつみ
津山 睦さん 道の駅みそぎの郷きこない 観光コンシェルジュ

木古内町出身。東京都内の大学を卒業後、都内で接客業に従事。木古内町に新幹線の駅ができることをきっかけに、町の地域おこし協力隊に応募し合格。2012年にUターンし、道の駅開設に向けて準備を進めてきた。2016年1月に道の駅オープン、同年3月に新幹線開業。



新幹線開業！9町の連携で道南西部地域を全国へPR

きっかけ

大学を卒業後、東京都内で普通の会社員として働いていました。特に不満はなかったのですが、自宅と会社を往復する平凡な毎日…。そんな時、地元の木古内町に新幹線の駅ができて、地域を挙げて盛り上げようとしていることを知りました。町では地域おこし協力隊を募集しており、任務終了後は新しくできる道の駅で観光コンシェルジュとして働けるとのこと。観光の仕事は未経験でしたが、応募することを決意しました。結果は、見事合格！2012年に地元に戻り、道の駅の開設に向けて準備を進めることになりました。

苦勞

道の駅では、木古内町だけでなく周辺の町と連携して、道南西部地域を盛り上げていく計画でした。そこでまず、連携する9町（木古内町、松前町、福島町、知内町、江差町、上ノ国町、厚沢部町、乙部町、奥尻町）のを知るために、1つの町について1か月間かけて勉強しました。そのうち1週間は、その町に宿泊して周辺を探索しなければならなかったのですが、地元の方々が本当に親切に助けてくださいました。この時お世話になった方々とは今でも交流があり、現在のコンシェルジュ業務でも色々とお助けられています。

満足度

道の駅開設以降、予想をはるかに超えるお客様に来ていただき、ありがたく思っています！お客様には、色々な町を巡っていただけるようご紹介しているのですが、多くのお客様に「とても良い地域ね」と喜びのお言葉をいただき、地域を気に入っていただけたことが嬉しいですね。私個人としては、周辺の町の方々との交流を通じて、仕事だけでなくプライベートでもお付き合いできる素敵な方々と出会えたことが本当に嬉しく、私の宝物です。「マグ女」にも参加させていただき、いつも元気をもらって、青森県の方々からも刺激を受けています（笑）！

これから

道の駅に来ていただいたお客様が、木古内町の町内も散策していただけるよう、色々な仕掛けを考えていきたいです。道の駅でも町の特産品は買えますが、ぜひ足を伸ばして町内の本店を訪ねていただきたいのです。また、「みそぎの郷きこない」の名前にあるように、例年1月13～15日に開催される「寒中みそぎ祭り」をもっと広めていきたいです。「みそぎ」はとても神聖な行事ですから、旅行の途中で木古内町に寄っていただくと御利益があるというような、「パワースポット」としてPRできたらいいなと思っています。

北の★女性たちへの
メッセージ

私は自分から何かを始めるタイプではないのですが、色々な方と会うことで道が開けて、思ってもみなかったことに挑戦できました。辛いから楽しいことだけやるのではなく、辛いことも楽しんでできたら素敵ですね。女性が元気に輝きを放っていると、その町も元気になります！

渡島【鹿部町】

あり た し の ぶ
有田 忍さん ウェル Well 代表、北海道女性起業協会 代表理事

1974年生まれ、鹿部町出身。函館市内の高校卒業後名古屋市内の企業へ入社。転職による道外勤務等を経験後リターン。函館市内のホテルを経て2002年に独立起業。2008年にコンサルティング事業開始。2012年、乳がん発症・治療開始。2013年に北海道女性起業協会設立。



今できることは今すぐ実行。それが後悔しない人生！

きっかけ

起業のきっかけはホテルウーマン時代に接客サービス業の楽しさを知り、この仕事を続けたいと思ったこと。が、自分の思うサービスと組織が期待するコストパフォーマンスが必ずしも一致しない、開きがあることに気がつきました。採算を度外視したサービスの提供は不可能ですが、より100%に近づけるサービスを提供したいとの思いが募り、独立して自分の考えの是非を確認したくなったのです。Well（業務請負業）を起業し1年、スタッフは総勢54名、平均睡眠時間3時間の日々の中で人間的にも成長させていただきました。

苦勞

Well起業後3年ほど経過し、転機が訪れました。思いがけないできごとが重なり、仕事が激減しました。それまで、お付き合いした取引先やスタッフがいましたが、生き残るために何かを手放すしかないと感じ思い切って業務請負業を止め、インターネット広告業に業種変更しました。2005年頃のことです。当時はまだやっと、インターネットが普及し始めてきた頃だったので同業者は少なく、一気に上昇することができました。それらの経験が生かされ、マーケティングや集客コンサルティングという今の本業に繋がっています。

満足度

27才で初めて起業した時、多くの人を雇用し、沢山の会社を築くことが経営者だと思っていました。しかし今は、“自分らしい”働き方があると考えております。北海道女性起業協会もその延長線上。「何かやりたい、頑張ってみよう」という女子向けのランチ会を企画し、12名限定で募集したところ、30人以上の応募が。結局日程を3回に分け、希望者全員とランチをしました。情報交換や交流の場のニーズを感じました。その後、協会立上げの準備を開始し、30名程の女性と一緒に立食パーティを開催、同時に立上げ告知を行ったのです。

これから

ランチ会で集合した方々。何かやりたいと思いながら、「やりたいことがわからない」「見つからない」「一人の女性として活躍したい」「子育て主婦で終わりにたくない」など、思いを形にすることにためらいを感じ立ち止まっている方が多かったです。そうした女性達とタッグを組み、やりたいことを見つけ、一人でも輝ける女性を増やしていく活動や、地元の企業が元気になるお手伝いをしたい。そして、協会名のおり道南だけではなく全道に活動を広げていきたい。私の住む町は人口4,300人のど田舎。ここから満を持して発信します、乞うご期待！

北の★女性たちへの
メッセージ

「新しいことを始めたい」と切り出すと必ず反対するヒトが現れ、断念する方が多いように感じます。でも、自分の最大の応援団は自分自身。自分を信じ、可能性を信じ、自分で判断し決断しよう。カナシイ・クルシイ・セツナイ、沢山アルアル。でも、一緒にチャレンジしましょう！

檜山【乙部町】

てらしま えりか てらしま えみ てらしま まりえ
 寺島 絵里佳さん・寺島 絵美さん・寺島 真里絵さん 江差追分 唄い手

3人とも乙部町出身。長女の絵里佳さん（1983年生まれ）は、2003年開催の第41回江差追分全国大会にて優勝。次女の絵美さん（1984年生まれ）は、2006年開催の第44回江差追分全国大会にて優勝。三女の真里絵さん（1987年生まれ）と共に、三姉妹で江差追分の魅力を発信。



（左から）絵美さん、絵里佳さん、真里絵さん



三姉妹で江差追分を追い求め、次世代へ伝えていきたい

きっかけ

私（絵里佳さん）は、幼少期から演歌や歌謡曲が大好きで、気付いたら歌っている…そんな女の子でした。初めてステージに立ったのも4歳ごろだったんですよ。年長さんだった私と次女の絵美が地元の民謡教室に通い始め、その後、私達のお稽古に付いてきていた三女の真里絵も一緒に通うようになりました。当時を振り返ってみると、江差追分や民謡との出会いはごくごく自然な流れだったのかもしれませんが、三人とも二十数年唄い続けていますので、それも私達に与えられた「運命」だったように思えてなりません。

苦勞

小学生の頃はお稽古のため、放課後に友達と遊べなかったり、海やプールへも行けなかったり、中学生になると部活動でたくさんになった後にお稽古が待っていました（笑）。声変わりではないですが、声が裏返って思うように出ない時期もありましたね。苦勞や犠牲にしてきたことも確かにありますが、「辞めた方が後悔する」と心に刻んでいました。真里絵は、姉二人が江差追分全国大会優勝のタイトルを取った後、周囲の期待が次第にプレッシャーに変わったようですが、大会出場を重ねることで「前を向いていくしかない！」と気持ちの切り替えがうまくできたようです。

満足度

地元・乙部町や周辺地域のイベントに呼んでいただき、三姉妹そろってステージに立てる喜びは格別なものです。そして、幼少期から私達を応援し続け、足を運んでくださる町民の方の存在は心の支えになっていますね。三姉妹そろって元気な姿を見せ、感謝の気持ちを唄声に込めて恩返しをしていきたいです。私一人で活動することも多く、江差町にある江差追分会館で江差追分や北海道民謡の実演のほか、江差追分会からの派遣や企業の懇親会、各地のイベントなどで唄っています。年齢を重ねるごとに、充実した「唄一筋の人生」への喜びは増していく一方です。

これから

所属する江差追分の支部「水堀（みずほり）愛好会」にて、2015年ごろから指導する立場になりました。師匠であった藤島重悦氏が2004年に亡くなり、長年指導者不在の時期が続いていました。30代の若さで師匠の後継者になるとは驚きでしたが、「江差追分の魅力を私らしく伝えていこう」と、20名ほどの生徒さんと日々向き合っています。真里絵は私達と同じタイトルを取ることを目標に頑張っていますし、絵美はおばあちゃんになっても唄っていたいそうです。私も声の出る限り唄い続け、活動の場を広げていきたいと思っています。

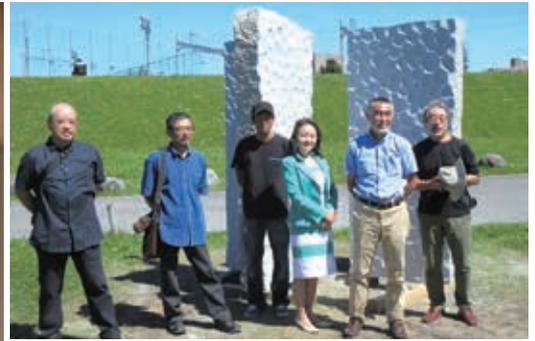
北の★女性たちへのメッセージ

目指すものは人それぞれ違いますが、自分の夢をつかむためには努力することを惜しまず、目標に向かってひたすら前へ進むことが大切だと思います。人より何倍も努力して自分に自信がつけば、よりよい結果は後から必ずついてくると思いますよ。

上川【旭川市】

ひさき きちこ
久木 佐知子さん 画廊 有限会社ギャラリーシーズ 代表

旭川市出身。1991年4月、旭川市内に画廊「ギャラリーシーズ」を開廊。旭川美術振興会理事、中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館協議会委員等を歴任、現在も旭川市文化賞選考委員などを務め文化面から地域振興に尽力。家業は大正13年創業の餅菓子店「一久大福堂」。



地域にアート「種」をまき、人々を感動に誘う喜び

きっかけ

アートに巡り逢えた喜び、表現者たちの思いが自分の目に焼きつけられていく魂が震えるような感覚。美術鑑賞を重ねるにつれ、こうした感動がその場、その時だけのものではなく、普遍的で、時を経ても色あせないものであると知りました。そんなアート体験が画廊「ギャラリーシーズ」を開廊した原点です。「シーズ」には二つのメッセージを込めています。一つは「女性たち=Shes」という意味、そしてもう一つは「種=Seeds」。この地にアートという種をまきたいと走り続け、気がつけば開廊26年となりました。

苦勞

表現者ではない私がまく「種」は、表現者をご紹介し、皆様に美術を身近に感じていただけるよう、力を尽くすこと。国内外の優れた作家の個展やその都度テーマに定めて展示する企画画廊にしたのも、そんな思いからです。でも、北海道の、しかも地方都市（旭川）の小さな画廊で企画展を開くことは想像していた以上に大変でした。アートマーケットが小さいというハンディもあります。作品展に合わせて作家のトークショーや作家を囲んでのレセプションパーティなどの取り組みを通じて、人と美術の出会いを演出してきました。

満足度

「シーズ」の展覧会で、80代の男性が、藤田嗣治（レオナール・フジタ）の絵の前で立ち尽くしていました。別の展覧会では、車いすの女性が「学生の頃に観た」という絵に心を奪われていました。画廊を訪れる人たちのそんな姿を目にするたびに、この仕事をしてきて本当によかったと思います。日常の慌ただしさに紛れて忘れてしまっていた感動が、アートに触れることでよみがえることがあります。多くの人たちをそんな瞬間に誘（いざな）うお手伝いができる、その幸せ！

これから

この地域に育てられたので、地域のためにできることを模索しています。2000年にスタートした「旭川彫刻フェスタ」の取り組みもその一つ。彫刻を街づくりに活かすとともに、市民の皆さんがアートに親しむことで、それぞれの心に沢山の引き出しを持ってもらえたらと願っています。「人と違うこと=個性」はアートの大きな価値です。アートを通して、一人ひとり違った考え方や生き方があっていいのだ、と肌で感じてほしいのです。今後もこの街にアートの種をまき、育てていきたいと思っています。

北の★女性たちへのメッセージ

“希望を天の星につなげ” 書家・中野北溟先生の作品で、私の好きな言葉のひとつです。どんなことも熱意を持って臨めば叶うことを信じて、恐れずに第一歩を踏み出してみたいと思います。夢をかたちあるものに・・・。

ママの働き方応援隊 はたら かたおうえんたい ぴっぷ校 こう

神戸市に本部があるNPO法人「ママの働き方応援隊」の支部として2017年、「ママの働き方応援隊ぴっぷ校」を立ち上げる。高校や大学、高齢者施設で「赤ちゃん先生クラス」の開催や、子育て世代が楽しめる独自のイベントを展開し、町の活性化にも役立っている。



「赤ちゃん先生クラス」を通して地域とつながる！

きっかけ

2016年に「ママの働き方応援隊」の存在を知りました。ビジネスシーンでは子育てが障壁になると感じていましたが、子育て中がメリットになる働き方に大きな衝撃を受けました。この活動に関わらなければ将来、後悔してしまうと強く思い、運営団体にコンタクトを取りました。翌年2月と5月に、赤ちゃん和妈妈が先生役となって教育機関、高齢者施設等を訪問し、人として一番大切なことを感じてもらう人間教育プログラム「赤ちゃん先生プロジェクト」の説明会を開催し、7月にぴっぷ校を立ち上げる運びとなりました。

苦勞

現在、一緒に活動をしている仲間が6名いますが、思うように人数が増えないことに悩んでいます。教育機関などへ行って「赤ちゃん先生クラス」を開催する場合、1クラス35名だとママ講師4名、トレーナー2名が必要となりますが、今のままだとぎりぎりの人数です。SNS（会員制交流サイト）などで活動の様子を発信して多くの人とつながり、知ってもらうように努力していますが、活動は始まったばかりなので、これからが勝負だと思っています。仕事や家庭との両立が難しいと感じることもありますね。

満足度

高齢者施設を訪問すると、赤ちゃんを抱いた利用者の方が涙を流して喜んでくださったり、また、普段は動かせない腕を自力で動かしたり、いつもは見ることのできない穏やかな表情になったりもします。高校や大学でも同様に、訪問すると生徒や学生さんの表情が笑顔に変わり、子育ての大変さを感じながらも親に感謝し、「将来自分も親になりたい」と思ってもらえています。参加する赤ちゃん和妈妈にとっても、触れ合いがメリットとなり、プロジェクトの必要性を改めて強く感じています。

これから

北海道の各地に拠点（支部）を置き、「赤ちゃん先生クラス」を全道に広めたいと考えています。道内の支部は、ぴっぷ校のほかには、札幌に2校があるだけです。10校ぐらいが増えて、互いに連携が取れるようになるのが理想です。子育て中に孤独感や、疎外感を感じるママは少なくありません。そんなママ達が楽しめるイベントや、赤ちゃんからお年寄りまで幅広い世代の方がくつろげるコミュニティスペースを作るなどして、お互いが助け合い、誰かに必要とされることで、地域全体が繋がっていければ、とても嬉しいです。

北の★女性たちへの
メッセージ

自分が「やりたい!」と思ったことに正直になりましょう。失敗は、失敗ではなく経験なので恐れずに行動しましょう。「母だから…、妻だから…」を優先しすぎないことも大切ですね。家庭の中心にいる母親が笑顔で生き生きとしていれば、家族の関係性も自然と良好になると思います。

上川【音威子府村】

ほっかいどう 北海 びじゅつこうげいこうとうがっこう 道北 びじゅつこうげいこうとうがっこう おといねっぶ美術工芸高等学校

1950年に北海道名寄農業高等学校音威子府分校として開校。1984年に工芸科へ転換、2002年に現校名へ変更。道内唯一の全日制工芸科を有し、全道各地から美術・工芸を志す生徒が集まる。遠方出身者は隣接する寮で生活。女子生徒が約7割を占める。村は、彫刻家・砂澤ビッキ氏の創作活動場所であった。



(前列左から) 大澤花鈴さん(2年)、平館萌さん(2年)、宮田絢乃さん(3年)
(後列左から) 須藤由希子教諭、押見菜奈教諭



美術・芸術と向き合うことで豊かな心を育てたい

きっかけ

宮田さん、大澤さん、平館さん:ものづくりや絵を描くことが好きで、地元(都市部)での進学を迷っていた時、両親が当校出身だったことや、担任からの勧めがあり、学校見学に行きました。そこでの体験が楽しく、寮の食事もおいしくて(笑)、楽しそうだと思いました。また、先生が生徒と深く関わってくれると感じ、村の大自然が開放的だったことも、入学を決意するきっかけになりました。

須藤教諭、押見教諭:私たちは配属先を選べませんが、人との縁がつながったこともあり、当校で働くことになりました。美術教諭としては、道内唯一の全日制工芸科がある当校に配属され、とても良かったと感じています。

苦勞

宮田さん、大澤さん、平館さん:周囲には個性的な人が多くて、最初は学校生活に慣れるのが大変でした。でも、自分もマイペースでよいと気付いてからは、とても楽しくなりました!高い技術を持った人と自分のことを比べて落ち込むこともありますが、もっと自分の技術を磨こうと思えるし、何より好きなことに一生懸命になれる環境があることを幸せに感じています。

須藤教諭、押見教諭:生徒は、美術や工芸を積極的に学びに来ているので、教諭として教えられるだけの知識や技術を身につけることに苦勞します。身近に頼れる先輩が多くいることが、助けになっています。

満足度

宮田さん、大澤さん、平館さん:大好きな美術や工芸の授業を存分に受けられること、寮で友達・先輩・後輩と共同生活できることが楽しいです!地元の普通高校に通うより、ずっとおもしろい学校生活を送っていると感じます。そして何より、気の合う友達に恵まれて、素直に自分を表現することができるようになりました。この学校に入学して、本当に良かったと思っています!

須藤教諭、押見教諭:道内では美術教諭がいない学校もある中で、美術・工芸が充実した当校で教えられること、また高い技術を持つ素晴らしい生徒たちに出会えたことが、これからの教職人生において財産になると感じています。

これから

宮田さん、大澤さん、平館さん:美術・工芸とずっと向き合ってきたことで、本当にやりたいことを見つけることができました。今後の進路として、芸術に関連する職業を選択する人もいれば、趣味としてやっていく人もいます。地元の普通高校では、気付くことができませんでした。好きなことに思う存分向き合える場を与えてくださった学校や先生たちに感謝しています。

須藤教諭、押見教諭:生徒が、自分自身としっかり向き合い人間としても成長する姿を見ることができ、自分は結婚・出産を経てもなお教職を続けたいと感じるようになりました。また、美術教諭がいない学校に向けて、遠隔配信等で芸術に触れる機会を作っていきたいと思っています。

北の★女性たちへのメッセージ

やりたいと思えば何でもできます!妥協せず全力でやらないと、後で後悔すると思います。性別に関係なく、自分にしかできないことがきっとあります。人との縁に感謝し、周囲の人と協力し合うことも大切です。でも周囲に流されず、自分を信じて進んでください。

上川【中川町】

さいとう あやこ
齋藤 綾子さん 木工クラフト作家

1985年生まれ、宮城県仙台市出身。東北学院大学大学院を修了後、環境調査会社に勤務。退職後1年間木工クラフトの修行をして、中川町へ移住、地域おこし協力隊として活動。2016年度末で地域おこし協力隊を終了し、現在はフリーで創作活動を行う。



地域材を使ったものづくりで木を大切に使いたい

きっかけ

大学院修了後に勤務した環境調査会社では森に入って調査を行うことが多かったのですが、切り倒された使えそうな木が林地残材としてたくさん残っており、なぜ利用されないのかという思いがありました。捨てられてしまう木材を何とかしたいという思いから、仕事を辞めて1年間の木工クラフトの勉強をしながら地域の木材で木材加工ができる場所を探していました。そのような中で中川町の「森林文化の再生」の取組を聴き、移住することを決意。さらに、地域おこし協力隊への参加について町の人からアドバイスをいただき活動を始めました。

苦勞

地元の仙台から遠く離れた中川町へ移住することに家族からは「何でそんなに遠くに行くの」というくらいで特に反対はありませんでしたが、実際に移住してみると、短い夏にイベントが凝縮されているなど、生活のサイクル、暮らし方、文化のこれまでの違いには多少の戸惑いは感じました。また、地域の木材を使いたいという思いで移住しましたが、町には製材所がなく、製材された木を買えないので、生木を荒削りして2年間乾燥させてから仕上げるなど木の処理に試行錯誤しています。

満足度

2～3年かけて木材を天然乾燥するなど手間暇かけてつくった木の器が、お客さまの手に渡ることがこの活動の中での大きな喜びです。また、町民の方が庭木を切ったものを材料として提供してくれたり、町が実施する森林浴のイベントの中で振る舞われる地元産の食材を使った料理にも自分の作品が食器として利用されるなど、町の皆さんにも協力をいただいています。自分でやりたいと思っていた林地残材を使ったものづくり、そしてそれを人に届けるという役割に少しずつ近づいてきたと思っています。

これから

とにかく続けていくことが今の一番の目標です。そのためには、地域おこし協力隊を卒業し、今年から自営で木工クラフトを続けていくことになりましたので、まずは経営をしっかりしなくてはいけないと思っています。また、お客様がほしいと思える価値があるものをつくり続けていかなければならないと思っていますが、今は世界中の作家たちが、SNSなどを利用してそれぞれの技術を披露し合っているので、私もそういった作家の皆さんと切磋琢磨しながら自分の技術を磨いていきたいと思っています。

北の★女性たちへの
メッセージ

初期には、あれこれ考えずに身を投じる勢いも必要だと思います。その後、自己実現の行く先とその立ち位置を見つけたら、そこからは、ひとつひとつの現実的な積み重ねが自分を形作るのだと思います。

佐野 由希さん 株式会社 米夢館 ごはんソムリエ

1978年生まれ、北見市出身。市内の高校、本州の短大を卒業後、母の向真理子さんが代表を務める美幌町の米夢館へ入社。「ごはんソムリエ」の資格を取得し、より専門的な知識とともに米の魅力を広めている。



さかさおはぎ「北海道おはぎ」



マチの米屋ならではの創意工夫で、その旨さを広めたい

きっかけ

短大は音楽科でしたので、将来は音楽の道へ進むことも考え、教員免許も取得しました。しかし、「お姉ちゃん、卒業後はどうするの？お母さん、待っているよ」と一言、妹に言われたのを機に決心しました。1927年創業で現在、母が三代目を務める米夢館へ卒業と同時に入社し、お米に関する知識を経験とともに深めていきました。さらに、専門家としての肩書きがあると仕事の幅が広がると思い2010年、代表の母とともに「ごはんソムリエ」の資格を取得し、オホーツク管内初の「ごはんソムリエ」として注目されるようになりました。

苦勞

お米は現在、スーパーやドラッグストア、コンビニなど場所を問わず販売・購入できるようになりました。そのため、米屋が同じ土俵に立ってはいけません。うちならではの創意工夫で、農家さんが丹精込めてつくったお米を、その思いとともに届けることが使命だと感じています。ただ、これが難しい。社会科見学で訪れた小学生の「ご飯はおいしくない」との言葉に、米本来の甘みやうま味を知らないのだと衝撃を受けたことがあります。「質より量」という考えも否定できないですし、本当に日々、試行錯誤の連続ですね。

満足度

お客様が求める好みのお米は千差万別です。そこが「ごはんソムリエ」の力量を問われる場面でもあります。好みを細かく伺い、商品を提案し、召し上がった後に「おいしかったよ」と言っていただけることが一番嬉しい。炊き方やおすすめ料理などを相談されることも嬉しいですね。また、「田んぼの広がる風景を残したい」という代表の思いから、1996年に米粉100%の「お米シフォン」を初めて完成、更に、社員のアイデアを生かした月イチ商品や、餅米であんこを包む「さかさおはぎ」の登場など、やりがいを感じています。これら「米屋のスイーツ」も、おかげさまで大変ご好評いただいております。

これから

人とのつながりやご縁に感謝しながら、地域に根ざし愛され、気軽に立ち寄ってもらえるお店づくりを目指してまいりますし、私が大好きなお米を気軽に食べてもらう工夫も続けてまいります。お米を小分けで販売することではあれこれ試せるほか、贈答品として、また意外なところでキャンプ用としてライダーに人気です。忙しい方のために炊飯ジャーでの炊き立てご飯の受け渡しを検討しています。催事販売のおにぎりの定番化や、精米工場の見学などを通じて食育に力を入れていきたい…やりたいことは山ほどあります！

北の★女性たちへのメッセージ

「人生一度きり」。まずはチャレンジすることが大切ですし、つらい時にこそ動いてみましょう。出る杭は打たれますが、出せば良いのです。きっと自分なりの道は見つかると思いますよ。支えてくださる周りの人へは「ありがとう」と感謝の気持ちを伝えましょう。

いとろ みどり いとろ さおり
 伊藤 緑さん・伊藤 早織さん 株式会社マイスター 代表取締役、専務取締役

緑さん（1948年生まれ）、早織さん（1973年生まれ）親子はともに遠軽町（緑さんは旧丸瀬布町）出身。早織さんは東京都内の大手化粧品メーカーで商品企画、マーケティング業務に長年従事。その経験を活かし2005年、緑さんと「株式会社マイスター」を遠軽町で創業。



（左から）緑さん、早織さん



母と娘で起業！遠軽町の食材を活かした化粧品づくり

きっかけ

起業以前の私（早織さん）は、東京都内の化粧品業界で長年働いてきました。販売を経て商品企画やマーケティング業務に携わり、仕事にやりがいを感じていました。ただ、30歳を目前にしてキャリアアップか独立かで悩んだ末、独立することを決意。「経験や強みを生かし、地元遠軽町の食材を原料にした化粧品開発」へ魅力を感じ、北海道へUターンしました。地方で創業するのは難しい業種ですが、「まだまだ地域の魅力は知られていない」このこともストーリーを掘り下げ、他社との差別化を図れるチャンスだと、前向きに考えました。そして母と一緒に遠軽町発の化粧品メーカーを立ち上げました。

苦労

ゼロからはじめた会社なので、大変なのは当たり前と考えるクセがついているようで、苦労だと感じる事は少ないです。ただ、道内でも地方発の化粧品メーカーは当時珍しく、企業を理解してもらい、商品への信頼と協力者を得るのに時間がかかりました。東京都にいた頃は当たり前のように多くの情報が入ってきましたが、今はさらに積極的に情報を求める姿勢が必要だと感じています。そして様々な価値観やニーズに柔軟に対応することを心がけています。母は、遠軽町商工会議所での活動も行っているため、そのネットワークを活かし、地域とのパイプ役としてのサポートもお願いしています。

満足度

地元の良質なハチミツを配合した入浴剤とボディソープの2品からスタートした主力商品「ピュアハニーシリーズ」に加え、枝豆やアスパラを使った「フォレストシリーズ」も加わり、現在商品は20種類ほどになりました。ユーザーも道内をはじめ全国に広がり、2016年10月、遠軽に直営店をオープンしました。これも私たちの商品を信頼して愛用して下さるお客様のおかげだと感謝しています。化粧品の仕事は大好きですが、会社が動けば常に課題が生まれるため、満足することはありません。しかしそれは新たなことに挑戦し続けているからこそだとも感じます。自身は大変ですが、会社としてはとても幸せなことです。

これから

今年で創業12周年を迎えます。昨年地元到店舗を構えたことで、私達の世界観をお伝えできる新たな要素が加わったと思います。今後は地元の企業として地域の価値を増やすべく、豊かな自然を活かした「マイスターの森」をつくるのが夢です。お客様を森へご案内して、商品が生まれる風土をリアルに感じていただきたい。町に足を運んでもらい、商品だけではなく地域のファンになってもらえるよう、土地の魅力を発信し価値を高める活動を続けたいです。ひいてはそれがブランド力の強化へとつながると信じています。より多くの方に北海道生まれの化粧品を広げていくため、近い将来に関東エリアにも店舗をオープンさせていきたいです。

北の★女性たちへの
メッセージ

性別や世代に関係なく、どうしてもやりたい事は止められてもチャレンジしたくなるものだと思います。夢は、見ることより見続けることの方が圧倒的に難しいですが、「情熱のたね」を見つけたら大切に育て、開花するのを想像しながら、日々の生活を大切に送ってみてください！

1987年生まれ、中札内村出身。札幌市内の短大卒業後、JA中札内に就職。士幌町で「夢想農園」を営む夫と出会い結婚、同町へ移住。農業の傍ら、2014年に若手女性のネットワーク「農と暮らしの委員会」を設立。2016年、道の駅「ピア21しほろ」のリニューアルを手がけるため「株式会社at LOCAL」を設立。



人気メニュー「剣先ハンバーグ」



農業女子が地元愛あふれる道の駅をプロデュース！

きっかけ

JA職員から農業者に転身し、今までの自分のキャリアを農業でも活かしたいと思い、お客様の顔が見える直接販売を始めたり、十勝管内の畑作、酪農、後継者、農業法人関係者などの女性ネットワーク「農と暮らしの委員会（略して「のーくら」）」を立ち上げたりしました。のーくら設立から3年、道の駅の改修の話があり、のーくら代表として町民ヒアリングに参加しました。新しい道の駅は、士幌町の食に着目し、観光客だけでなく地元の方にも愛されるような、士幌町の魅力発信の拠点にしたいと考え、希望を叶えるべく会社を設立。町から飲食部門の運営委託を受けることとなりました。

苦労

20歳代の農業女子がプロデュースする道の駅として注目度は高く、オープン直前にテレビの取材を受けたこともあり、2017年4月23日のリニューアルオープン初日には町民より多い約8,000人の来場者がありました！続くGWでも客足は落ちず、忙しい状況がしばらく続いた結果、スタッフが過労で次々と倒れてしまいました。ここで私も倒れるわけにはいかないと、少ないスタッフと協力しながら、自分の精神状態を保つのは大変でした。そんな苦難を乗り越えたスタッフの結束力は強く、今まで一人も退職することなく、現在は落ち着いて楽しみながら仕事ができています。

満足度

毎日幸せいっぱいです（笑）！地元士幌町の魅力を集めた施設にしたいと思っていたので、希望が叶ったことは満足していますし、町民の方からは「いつも見ているよ」「忙しいだろうけど体に気を付けて」と優しいお言葉をかけていただき、感謝しています。士幌町の食にスポットを当てているので、レストランとカフェを設けていますが、お客様から「おいしかったよ」「また来るね」と声をかけていただけることは大変嬉しく励みになります。私たち農業者の「おすそわけ野菜市」コーナーもあり、キッズスペースに野菜の形のおもちゃを置くなど、農業と士幌町にとことんこだわっています！

これから

道の駅は、これから冬に向けて、短編映画祭や餅つき大会など室内でも楽しめる様々なイベントを企画中です。士幌町らしさを大切に、いつ来てもおもしろい、進化し続ける道の駅にしたいですね。会社としては、スタッフの夢を叶え続けられる企業にしたいです。うちのスタッフはみんな志が高くて、将来町内でカフェやオーベルジュをやってみたくて言っているの、会社として支えられるようになりたい。それが、ゆくゆくは士幌町のためになると思うのです。「夢想農園」や「のーくら」の活動で学んだことを活かして、これからもステップアップしていきたいです。

北の★女性たちへのメッセージ

女性農業者の大先輩から「辛いことがあってもあなたなら大丈夫、周囲の人から愛されているからね」という言葉をいただきました。人さまから愛していただくためには、私自身が人さまを愛し、愛される努力をしていかねば、と感じました。皆さんも是非、一緒に愛される女性に。

十勝【上士幌町】

かみしほろ 上士幌ガールズバルーンクラブ

2017年2月結成。全員が女性のチームは道内で唯一、全国でも恒常的に活動しているのは2チームのみ。現在メンバーは代表の早坂彩さん（畑作業）、瀬戸千尋さん（保健師）、鈴木香さん（酪農業）、大道あゆ美さん（町教育委員会職員）、乾杏也香さん（栄養士）の5名。



「上士幌ガールズバルーンクラブ」の皆さん
(左から)鈴木さん、瀬戸さん、大道さん、早坂さん、乾さん



「そらガール」から町を熱気球を知ってもらいたい

きっかけ

上士幌町は毎年夏に「上士幌バルーンフェスティバル」を開催している熱気球の町ですが、人口の減少や高齢化も進み、チーム数は全盛期の半分以下、熱気球パイロットも現役では数人という状況になっています。一昨年亡くなられた町役場の先輩で、パイロットだった関克身さんから、3年ほど前、「ガールズチームを作らないか」との声をかけられたことから、仲間集めやパイロット免許の取得など準備を進めていき、今年2月に「上士幌ガールズバルーンクラブ」を設立することができました。

苦勞

仲間集めは、他チームからの引き抜きはしないことを独自のルールとしました。チーム作りを後押ししてくれた関さんが亡くなり、最初は本当に不安でしたが、今は信頼できる仲間が集まり、楽しく活動できています。また、トレーニングの日は、気象状況を見ながら夜が明ける前に準備をして、明るくなるとフライトし、終わったら仕事に出かけます。朝が早いことと気球の機材が総重量で約400kg、それぞれの部品が30kgもあり、それを運んで用意するのは女性だけのチームですので、慣れるまでは大変でしたね。

満足度

世界大会も開催されたことのある佐賀県での大会に参加できたことは、素晴らしい経験となりました。SNSを通じての交流も広がりを見せ、また、設立のきっかけとなった関さんのご家族、メンバーのご家族、そして何よりも地域の皆さんや企業にまで応援していただいている事は、大変心強いです。私たちの熱気球は、地元企業の支援により製作することができたものです。私たちがそうしてきてもらったように、皆さんに熱気球で少しでも恩返ししていきたいです。

これから

私たち「上士幌ガールズバルーンクラブ」のテーマは「結(ゆい)」です。熱気球は離陸前の準備や着陸後の回収・運搬など、到底ひとりでは飛ばせないものです。また、活動を続けていくためには、地域の人たちとメンバー同士のつながりや結びつきが何よりも大切だと思っています。これからも、地域の皆さんに楽しく熱気球で飛んでいる私たちの姿を見せていく、そして私たちが活動することで、「上士幌町」や「熱気球」といったキーワードを知る、一つのきっかけになればいいなと思っています。

北の★女性たちへの
メッセージ

何度もあきらめかけ、挫折をし、初めは独りぼっちでの活動がこうして繋がり、様々な出会いの風が吹き、全国でも珍しい女性だけのクラブチームを結成することができました。小さな風は自分でも起こせます。様々な風が今後も吹き続け、大きな「結」となりますように。

ふじい 藤井 史織さん べる べじい Farm Bell Veggy 代表

1984年生まれ、名寄市出身。北海道立農業大学卒業後、名寄市の実家で就農。サラリーマンの夫と出会い鹿追町へ移住し結婚。郵便局に勤務した後、ファーム「Bell Veggy」を立ち上げ四季成りイチゴを栽培。農業女子ネットワークはらべ嬢に参加。夫・長男・次男の四大家族。



チャンスを活かして、農業へ再チャレンジ

きっかけ

鹿追町で結婚する前も実家で就農しており、元々農業をやりたいと思っていました。夫も家庭菜園で火がついたこともあり、10年後くらいにチャンスがあれば農業をやりたいと話していました。2014年に地元出身の夫のネットワークを通じて、イチゴ栽培をしていた畑作農家から四季成りイチゴ栽培の施設一式をすべて込みで引き取ってくれるならば譲ってくれるとの話をいただき、この先こんな良い話はないと思い、イチゴ栽培自体の経験や知識はなかったものの思い切ってやってみようと思いました。栽培は主に自分が、出荷や営業は夫が担いお互いの得意分野を活かしています。

苦勞

私も夫も農業者ではなかったので、農地を買うことができませんでした。雑種地などでトラックの出入りなどがしやすい等の条件の場所を探しました。また、初期投資についても農業関係の資金は使えないので、日本政策金融公庫の女性起業家支援資金を活用しました。農業をするということ自体は、親の姿を見て肌で感じてはいましたが、いざ経営となると難しいものです。栽培知識もなかったため、近くでイチゴ栽培をしている会社に1年間パートとして採用していただき、管理作業など一連の流れを習得させていただきました。

満足度

次男が通うこども園の役員となったことから、給食委員会に参加することになり、直接、栄養士さんなどとお話ができるようになりました。鹿追町が地元食材にこだわった献立をつくっている中で、「藤井さんのイチゴを学校給食にどうか」というお話をいただき、提供させていただくこととなりました。また、近所の保育園が散歩で農園に訪れた時にイチゴの収穫体験をさせたことがあり、その時の園児が小学生になっても覚えてくれたことがとてもうれしく、こうやって地域のみなさんとのつながりが徐々に広がりつつあることを、とてもうれしく感じています。

これから

イチゴの栽培を始めたばかりですが、今後は、イチゴ以外の野菜の栽培にも取り組んでいきたいと思っています。また、イチゴを使ったジャムやアイスなどの加工品の製造・販売にも挑戦してみたいです。将来的にはイチゴやハスカップをはじめとするベリー類の収穫体験ができる観光農園にしたいという思いもあります。そのためにも、色々なチャンスを利用して自分がやりたいことができるよう学び、スキルアップをしていきたいです。私たちができる農業のスタイルで、私たちが頑張った分だけ喜びが帰ってくる。生産者も消費者も、みんなが楽しめる農業のあり方を考えていきたいです。

北の★女性たちへの
メッセージ

社会人になり、農業の他にも様々なお仕事等を体験してきました。しかし、まだまだ世の中を知るにはもっと沢山の経験が必要なんだと常々思われます。現在もスキルをあげるため、何でもやってみよう！という気持ちでいます。まずはチャレンジ。地域を盛り上げていきましょう。

十勝【清水町】

あんどう とみこ
安藤 登美子さん 有限会社コスモス 代表取締役

1955年生まれ、清水町出身。帯広の高校卒業後、清水町役場勤務。1978年に結婚。87年に夫の賢治さんが有限会社コスモスを設立。生まれた子牛を2〜3ヶ月育てる「育成農家」と、出荷まで肥育する「肥育農家」の一貫牧場。従業員の半数が女性。長男夫婦は帯広市在住。



命に無駄な命はない。すべては牛のために、人のために

きっかけ

高校を卒業後、清水町役場に勤務。結婚後は、帯広市内で喫茶店を経営するなど、サービス業に関心がありました。乳用牛ホルスタインの雄を肉用牛として普及させる仕事をしていた夫（JA職員）が、1987年に肉用牛の肥育を主眼に（有）コスモスファームを創設。私は、国道沿いに開設したレストラン「風車」や道東初のローソン店の開設・経営に携わるなどしてましたが、3年後に夫が事故で他界し、借金と牛だけが残されました。肉牛経営が厳しさを増す中、資金繰りに奔走する毎日。2003年、牧場経営に身を投じる覚悟を固め、現場に入ることに。

苦勞

毎日、頭の中は資金繰りのことばかり。会社創立の翌年に素牛を80頭導入しましたが、高価な素牛を導入・肥育しても、肉牛として利益を確保できるか否かは未知数です。経営を続けるためには、更なる投資が恒常的に必要。「お店を売ってでも牧場を続けます」と宣言し、離農を予想する融資元を驚かすことも。「やる気は人一倍ある。やる気は担保にならないのですか」と膝詰め談判も度々。その後は「肉牛生産組合」の仲間と共に、お互いに歯を食いしばって、励まし合いながら今日までできました。

満足度

現場に入り、はじめて「自分は牛好きなんだ」と気づきました。普通はスルスと育つ健康な子牛を選びますが、ファームでは、未熟な子牛や生まれつき病弱な子牛も受け入れているため、数日しか生きられないことも。そんな子牛に「ミルクは飲んでるか」「病気はしていないか」など、寄り添いながら、目を掛け、手を掛け、次の日の朝、「ちゃんと立ってる！」と歓喜することも。50年前までは、乳用牛として価値のない雄牛は「廃棄物」でしたが、肉用牛としてその命を無駄にすることがなくなり、夫の夢が少しずつ「現実」になってきました。

これから

2014年に、管内の肉牛牧場として初めて「農場HACCP」の認証を取得。翌年には、ブラウンスイス牛の「無塩せきコンビーフ」が「北のハイグレード食品+2015」を受賞するなど、ファームの新たな取組が始まっています。他方で、現在は「牛バブル」の時代。雌雄判別の技術も進み、牛自体が集めづらくなっているため、黒毛和牛の繁殖に力を入れていきます。そして、4年前から経営に参画し、力量を発揮している長男にパトタッチし、私は牛に寄り添いながら、帯広にいる3人の孫との時間を作りたいですね。

北の★女性たちへのメッセージ

高校時代は陸上部。毎年、新たな目標を掲げ、己には厳しかった分、他人には優しく接することができます。一人では何もできませんが、様々な個性の人達がお互いの長所を尊重し、協調する気持ちが何よりも大切。夢を叶えるのは、「やる気」だと思います。

十勝【本別町】

まえだ あきこ
前田 晶子さん 前田農産食品株式会社 取締役

1975年生まれ、神奈川県横浜市出身。東京農業大学（世田谷キャンパス）を卒業後、東京都内の造園設計コンサルタントに就職。結婚を機に退職し、夫の実家がある本別町に移住。実家の農業ではなく他の仕事をしていましたが、長女出産後の2003年に前田農産食品合資会社（現在は株式会社）に入社。



自社農産物を使って安全で手軽においしい商品を展開

きっかけ

結婚を機に本別町に移住し、最初は農業ではなく他の仕事をしていたのですが、家業である前田農産で経理を担当することとなり、入社しました。当時、道産小麦粉が出始めた頃で、パンづくりにはまっていた私が早速使ってみたところ、家族からは大好評！うちでも小麦を作ってみようということになり、まずは小麦を作付けし、それから小麦粉を作って小分けにしたものを周囲に配るところから始めました。今は、作付けした小麦の9割をパン用小麦粉にし、生産は夫、製造・販売は私が担当しています。

苦勞

小麦粉が軌道に乗り、小麦畑で輪作※できる農作物を探していた時、夫と「ポップコーンが良いのでは？」と話していたところ、夫がポップコーン作付け用の機械と製造用設備を購入してしまっ…！多額の投資をすることになり、覚悟を決めてポップコーンの味付けやパッケージのデザイン等を決めました。5人の子供と社員を守るために必死でしたね（笑）。子育てとの両立も、2人目までは自分一人では何とかできてしまうので大変でしたが、3人目からは周囲をフル活用！今は上の子達も支えてくれます。

満足度

おかげさまで小麦粉もポップコーンも大変ご好評いただいております。卸だけでなくインターネット等で直売もしているので、お客様から直接感想を伺えることが励みになります。生産者の顔が見える小麦粉は珍しいので、都市部のパン店や菓子店の方が小麦畑を見に来てくれることも嬉しいですね。会社も順調にスタッフを増やし、女性社員4人のうち3人が子育て中です。私も含めて、子育てとの両立のためにお互い支えています。彼女たちが生き生きと働いている姿を見ると本当に嬉しく、いつも元気をもらっています。

これから

製造では、目標だったHACCP管理基準を導入することができました。今後は、北海道HACCPの認証を目指していきたいです。また、自社農産物を使った商品を色々開発していきたいです。ポップコーンのように、安全で手軽に美味しく食べられるものを提供したいと考えており、ホットケーキミックスやインスタントラーメン等を検討しています。さらに、社員と一緒に会社も育てていきたい。道外からも積極的に新入社員を採用したいです。会社が成長することで、地域を盛り上げていくことができたらと思っています。

北の★女性たちへのメッセージ

私は「自分に何が向いているのか」ということばかり考えている時期がありましたが、やっているうちに「得意な仕事」になっていました。自分の得意不得意は、自分自身では意外と分からないものです。まずはやってみること！今は、やり続けて良かったと思っています。

※「輪作」…農業手法の1つで、同じ土地に別の性質の数種類の農作物を何年かに1回のサイクルで作っていく方法。

釧路【釧路町】

いのせ 猪瀬 えみこ 恵美子さん 釧路町鳥獣被害対策実施隊員

1953年生まれ、釧路町出身。釧路市内で会社員、団体職員を経て1989年に実家の農業を継ぎ釧路町で就農。43歳で狩猟免許を取得。翌年、町の有害鳥獣駆除員（現：鳥獣被害対策実施隊員）となる。町内のハンター16名のうち、女性は猪瀬さん一人。



農作物を守るため、地域で信頼されるハンターに

きっかけ

36歳の時に家業を継ぎ、農業者となりました。当時、うちはブロッコリーや大根などを作っていましたが、現在のように鹿よけの電気柵が普及していなかったため、鹿による被害を多く受けていました。父は、農作物の被害を減らすために狩猟免許を取得しており、父が活動する様子を見て、私もハンターになろうと決意しました。そして、43歳の時に狩猟免許を取得。翌年からは町の有害鳥獣駆除員（現：鳥獣被害対策実施隊員）をしています。2015年には、わな猟免許を取得し、町で唯一の資格者として活動しています。

苦勞

駆除は年間を通じて行いますが、釧路町の今年度の狩猟は10月から3月までが可猟期間となっています。今は、鹿よけの電気柵が多く普及したので農作物の被害はかなり減っていますが、電気柵をしていない家庭菜園で畑を囲っている網に鹿がかかることが多く、駆除しています。山の斜面など条件の悪い場所で鹿を倒すこともあり、回収が一番大変です。鹿は1体130~150kgはあり、これを女性一人の力で運ぶのは本当に苦勞しますね。わな猟の際にも、わなを扱う時にかなり力が必要で、体に無理がかかって痛めてしまい、何度か手術しています。

満足度

自分の畑を守るだけでなく、地域の方々の役に立ちたいと考え、町のハンターになったので、皆さんの要請を受けて対応できることが一番嬉しいです。近所の方々は、私がハンターであることを知っているようで、鹿が網にかかった時には町に連絡するよりもまず、私に直接連絡が来ます。対応が早いことが一番重要ですから、近所の方々に好評いただいています。狩猟には、生物多様性の保全のための原則があり、人間と野生動物が共存する方法の一つでもあります。その使命と動物福祉の理念を持ち、今日も山を走ります。

これから

倒した鹿は処理して食肉にできますが、町内に処理施設がないので、自分でさばいて近所に分けるなどしています。近隣では、釧路市阿寒町や白糠町に処理施設がありますが、できれば近くに処理施設ができてほしい。今は、自分で処理しきれないことも多いので、皮も含めて、もっと鹿を有効活用できるようになればいいと思っています。ハンターは、住民の生活圏の中での活動なので、緊張感を持って、感謝の気持ちを忘れずに活動しています。また、ハンターとしての自覚を常に保ち、責任感を持って活動を続けていきたいです。

北の★女性たちへの
メッセージ

常に謙虚な気持ちで行動することで、頑張らなくても結果がついてくると思います。体力面など男女で差が出ることもあるので、そこはお互い支え合い、頑張りすぎないこと。楽しむことが一番です。経験豊富な方々と積極的にコミュニケーションを取り、知識を吸収しましょう。

根室【根室市】

ふくだ 福田 あゆみさん キラキラ Kira Kira (旧ねむろ☆きらきらママフェス実行委員会) 代表

1985年生まれ、根室市出身。根室市内のアパレル関係の店でインターネットショップを担当、結婚を機に退職し2児を出産。2015年に「ねむろ☆きらきらママフェス実行委員会（現在の「Kira Kira」）」を設立。パート勤務や実家の旅館手伝い等、仕事と両立している。



福田さん(左)と長女、次女



ママが女性として輝き、笑顔で明るい根室に

きっかけ

「ねむろ☆きらきらママフェス実行委員会」を立ち上げた当時は、根室市内に育児中のママを対象としたイベントがありませんでした。私も育児中であり、育児に追われ社会から孤立したような女性や、交流が少なく交流の場を増やそうとしている女性、家事・育児・仕事等で心身共に疲れている女性に癒しを提供したいと思いました。ないものは自分で作ろう!と考え、賛同してくれる仲間を集めて、イベントを開催すべく実行委員会を立ち上げました。「何もなくてつまらない」と嘆いていても何も変わらないので、自分ができることは積極的にやっていきたいと思ったのです。

苦勞

イベントは、男女共同参画体験型講座に始まり、骨盤体操、ベビーヨガ、肌診断、ハンドマッサージ等、子育てママのための癒し体験コーナーを設置。託児も設け、全て無料で提供しました。一番苦勞したのは費用面です。メンバーで出し合える金額も限られていますので、サービスをご提供いただいた方々には、ほぼボランティアとしてご協力いただいた形です。今後の活動においても、費用面は課題ですね。あと、メンバーとスタッフは、子育て中・仕事上の女性でしたので、時間のやりくりも大変でした。

満足度

イベントのテーマは「ママが女性として輝ける」として、子育て中の女性を心身ともに癒すことで笑顔がもっと増え、ママの笑顔を出発点に根室を明るくしていきたいと考えました。アンケート結果では、癒し体験コーナーの参加者から「こんなイベントを待ち望んでいた」「またやってほしい」等、満足感のある感想が多く寄せられました。また、男女共同参画体験講座の参加者の半数は男性で、関心の高さが伺えました。さらに、根室市の保育士の方と託児ボランティアの方の活動のご縁につながるなど、参加者同士の交流が多くあり、充実感・達成感のあるイベントになりました。

これから

現在、私はシングルマザーとなり、メンバーの数人も出産するなどライフイベントが重なったため、イベントは実施していません。しかし、自分たちのできることを少しずつやっていきたいと思い、フェイスブックで根室市内の子育て情報等を発信しています。イベントもまた開催したいと企画を練っており、小規模でも開催回数を増やすなど工夫して、根室市民の方々に楽しんでいただけるようにしたいです。根室市という小さなまちですが、周囲の方々の支えや人の温かみに感謝しながら、これからも活動を続けていきたいです。

北の☆女性たちへのメッセージ

私自身、何かに自信があった訳ではありませんが、自分の目的さえハッキリしていればおのずと良い方向に向かっていくと思います。そして、つまづきそうになってもぶれない心が大事です。毎日の生活に追われ余裕がない時もありますが、日々勉強、諦めず頑張りましょう!

根室【別海町】

まつだて あいこ
 松館 亜以子さん SWEETS工房 Maruca マルカ 店主

1983年生まれ、別海町出身。パンタン製菓学院（現：レコールパンタン、東京都）を卒業後、辻口博啓氏が経営する「モンサンクレール」に就職。その後、カフェレストランやオーガニックショップ等に勤める。結婚し第二子出産後に別海町へUターン。2012年に「Maruca」をオープン。4児の母。



田舎でも「無い道は作れる」、夢を叶えてパティシエに

きっかけ

小学生の頃からお菓子づくりが好きで、パティシエになりたいと思っていました。念願が叶って「モンサンクレール」で働き始めましたが、辻口シェフが注目され始めた頃で大変忙しくなり、体調を崩して退職。その後、結婚・出産を機に別海町へ戻り、子育て等でバタバタしてお菓子づくりからは遠のいていましたが、子どもの幼稚園のママ友から「お菓子教室をやらない？」と誘っていただき、また少しずつお菓子を作るようになりました。そのうち、ママ友から記念日のケーキを依頼されるようになり、画像や口コミがSNSで広まって、ケーキづくりが忙しくなりました。「これはもう仕事にしよう!」と、Marucaをオープンしました。

苦勞

まず、食材の確保が大変でした。通常、菓子店では大量に使用する乳製品等の食材を業者に配送してもらうのですが、私は別海町の市街地から離れた尾岱沼地区に工房を構えたので、最初は乳業メーカーから配送を断られ、数件交渉してようやく配送してもらえるメーカーと契約することができました。また、店舗での販売はせずオーダーメイド形式にしているため、出店する時は主に地元のイベントなのですが、価格設定を抑えたつもりでも「高い!」と言われてしまい、良い材料を使った美味しいものの価値・価格を受け入れてもらうのに、少し時間がかかりました。

満足度

別海町、特に尾岱沼にこだわっているため、地元の方々に喜んでいただけることが本当に嬉しいです。以前、地元中学校に依頼されて講演したのですが、私が尾岱沼で起業したことで、子どもたちに「田舎でも夢を諦めなくて良い」ということを伝えられたことは、良かったと思っています。「私も尾岱沼でケーキ屋さんをやりたい」と言ってくれた子もいました。地域とのつながりを大切に、イベントではマフィンを中心に販売しているのですが、屋台が並び中にスイーツ店が出店していると、特に女性からは好評です（笑）。地元の方々から直接喜びの声を聞くと、やりがいを感じます。

これから

店名のMarucaは「丸い (Maru) ケーキ (cake)」から付けており、丸いケーキには「誰でも平等に」という意味があるそうです。これからも「多くの方に自分のお菓子を食べて喜んでほしい」という思いを軸に、新作の研究や新たな味の開発など、お客様が求めるものを追求していきたいです。オーガニックや健康に配慮したお菓子も作りたいし、地元の食材を使って付加価値を付けるような、地元食材を飛躍させるようなお菓子も作ってみたい。人生の最終目標としては、Marucaをカフェにして地域の憩いの場にできればいいなと思っています。地元へ寄り添いながら、長く続けていきたいです。

北の★女性たちへのメッセージ

夢を叶えたいと思ったら、自分の意志を貫く覚悟が必要です。本当にその時しかできないことがあるし、やり始めたら頑張れるものです。やってみてダメなら他を探せば良いという、軽い気持ちも大事。身近な人が喜んでくれて、幸せな時間が増えるような夢を叶えてください。

根室【別海町】

やまもと ゆい
山本 唯さん NAGI GRAPHICS グラフィックデザイナー

1988年生まれ、別海町出身。札幌市内の専門学校卒業後、東京都内のセレクトショップで販売員として勤務。その後、札幌市内の広告代理店等に勤め、結婚を機に別海町へUターン。幼稚園の事務員として働きながら、2015年、夫と共に「NAGI GRAPHICS」を設立。



田舎でこそ需要がある！デザインで地域を元気に

きっかけ

実家は酪農業でしたが、私はファッションへの憧れがあり、就職は東京都内のセレクトショップへ。ある日、店内のポップ広告を自作したのですが、それがすごく楽しくて…「グラフィックデザイナーになりたい!」と思うようになりました。それから札幌市で広告代理店等に勤務していましたが、別海町で漁師をしている夫と出会い結婚、地元へUターンしました。ここでデザインの仕事をする気はなかったのですが、2015年に町内で実施された滞在型テレワークの実証実験を受託した会社の方や、滞在されていた東京都の企業の方々からアドバイスをいただき、夫もデザインが得意だったこともあり、二人で起業しました。

苦勞

私は事務職兼グラフィックデザイナー、夫は漁業兼グラフィックデザイナーです。デザインは自宅のできる仕事なのですが、私たちが住んでいる地域はインターネットの接続環境が悪くて、お客様から画像データを受け取れなかったり、こちらで作成したデータを印刷会社に送れないことがあります。遠方のお客様と打ち合わせする時には、お客様から「スカイプで打ち合わせをしませんか」とご提案いただくこともありますが、スカイプも使えない状態です。市街地から離れた地域でも、ネット環境を整備してほしいと思います。

満足度

別海町で開業したことで、地元の方々からご依頼をいただくことが多くなりました。お客様からは、「近くにいてくれたからイメージを伝えられて良かった」とご満足いただけて、嬉しく思っています。私たちも、デザインする際にはなるべく直接会ってお話を伺うようにしています。その方が、お客様の希望するイメージをより強く感じられるのです。近年では、母校である別海高校のポスターやパンフレットをデザインさせていただけたことが本当に嬉しく、地元へ貢献できることにやりがいを感じています。

これから

グラフィックデザインは、田舎ではあまり需要がないと思っていましたが、開業してみると意外と忙しく驚いています。田舎でこそ、需要があったのだと実感しました。今後は、地域のデザインにも関わっていきたいと思っていますので、地元の特産物やお土産品のパッケージをデザインしてみたいですね。別海町は酪農家の方が多いので、牛乳のパッケージデザインでブランディングのお手伝いもしてみたい。今は第一子を出産したばかりですが、地元へ私たちのデザインがあって、子どもに見てもらえる日が来るといいなと思っています。

北の★女性たちへの
メッセージ

副業としてデザイン会社を立ち上げ、やっていけるか不安でしたが、デザインの仕事は在宅ワークが中心で時間の融通が利くので、他の仕事や子育てをしながらでもやっていけることがわかりました。デザインに興味のある方はぜひトライして、デザインで地域を元気にしませんか!